The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新撰万葉集上下巻の詩歌共通語彙
Author(s)	神谷, かをる
Citation	語文. 1989, 52, p. 26-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68795
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新撰万葉集上下巻の詩歌共通語彙

神谷かをる

一

白露丹風之吹敷秋之野者貫不駐沼玉曽散芸留（四四〔八七〕）

秋風扇処物皆奇　白露繽紛乱玉飛
好夜月来添助潤　嫌朝日往望為晞（四四〔八八〕）

『新撰万葉集』は、右の例のように、詩歌において、「白露」のごとく、文字表記も語形も語義も全く同じ共通語を持つことが多い。一首の和歌と一首の漢詩を並べて編むこの集において、その一対の詩歌は必ずしも翻訳といえないにしても、深い関連性を持つことは疑えない。今、その関連性の一つとして、両者の共通語に注目してみたい。

右の例歌は、「秋之野」、例詩には「秋風」が見える。この「秋野」は、下巻の「女郎歌十二首」において、漢詩にも登場する。

女郎何葉節草隠　候周忘レ秋人袖匂　終日秋野収二黄色一　通夕露孕染レ花白（二五五〔五〇九〕）

又、例詩の「秋風」「夜月」は和歌にもある。

秋風丹綻沼良芝藤袴　綴刺世砥手　蚤鳴（四三〔八五〕）

夏之夜之月者無程乍明朝之間緒曽加許知寄介留（一四三〔二八五〕）

（「夜の月」はこの一首のみ。それも「夏の夜」の「月」の意であろうが、一まず「夜の月」にも入れることにする）

このようにみてくると、並列一対の詩歌のみならず、直接無関係の離れ離れの詩歌にも同一語が出現してくる。それも含めて、共通語とよぶこととする。なお、漢字表記で一字の語は扱わず、漢字二字の語を考察対象とする。底本としては、『新撰万葉集　校本篇』（寛文七年板、浅見徹・木下正俊、昭和ぶりんと）を用い、番号もそれに依る。（『新編国歌大観』の番号も参考に〔　〕に入れ、漢詩の付訓は寛文七年板の影印、京大国語国文資料叢書十三のそれに従った）。所謂原撰本には下巻に漢詩がないが、そのことに留意しつつ下巻の詩をも扱う。

二

まず共通語を全て抜き出す作業から始めるわけだが、抜き出し方の原理は次のようにする。和歌における語と、漢詩における語とが、形態（語構成）と文字において全く同じ語を、並列一対の詩歌はむ

ろん、並列を外しても抜き出す。ただし、同字を原則としたが「鹿」と「麋」（鹿声）、「谷」と「谿」（谷風）、「枝」と「柯」（枝花）、「歳」と「年」（去年・去歳、年月・歳月）は同語とみなすことにした。「樹」が一字（〔一五〕「夏樹」の詩は「夏樹」）あり、「樹」の本もあるので、同字とみなしておいた。他に「髣髴」と「彷彿」（二四三）、「郭公鳥」と「郭公」（二四など多い）、「菖蒲草」と「菖蒲」（二六など）も同語とみなした。また、「梅之花」「木之葉」のごとく、和歌では「之」が入ることが多いが、[注2]それらは、詩の「梅花」「木葉」と同語とみなした。そして、語形と文字が同じで、意味もほぼ和漢で同一の語を原則とした。むろん、「指南（車）」と「しるべ」のごとく、和漢でその意味する範囲が異っている場合も、一部分がその詩歌において重なっていれば同語とみなした。「藤袴」「芽」は、漢語として考えると、和語の植物名とは意味は異なるが、後述するように、和漢で意味の大差はなく用いているのでこれも含めた。「郁子」は、『和名抄』に「郁子・ムベ」とあって、「あけび」の一種の植物名だが、和歌では、「宜」の意の訓みを当て字に用いている。これも含めておいた。むろん、語形・文字が同一であっても、和漢で語や句の切れめが異っている次のごとき場合は別語とした。

夏山丹恋敷人哉入丹兼音振立手鳴公鳥（三六〔七二〕）

一夏山中驚二耳根一、郭公高響入二禅門一、……（三六〔七三〕）

即ち「一夏、山中」が詩の語句での用法だが、文字のみ見ると、「夏山」のように見えやすい。かかる例は珍しくなく、視覚上は、一見、共通語のごとく見える。そういう効力もねらって作詩しているものも少なくないのであるが、後に再述する。なお、一字語が連って二字になって二字語のようにみえるが、一語か連語か決めにくいものもある。「落涙・流涙・草隠・解凍・鳴蟬・散花・花散・往雁」などは、一語とみなさなかった。

以上のようにして共通語を選んで、上下巻での異り語数と延べ語数を調査した。

	上巻	下巻	上下巻
異り	73	98	108
延べ語数	77 134	200 164	277 298 (575)

全歌数二七八首・全詩数二七七首ゆえに、大体平均して一詩歌に一回は共通語が現れていることになる。

〈上巻〉

上巻で詩歌並列一対をなし、その中で共通語となっているのは二五語ある。

梅花・花樹・花香・鶯声・蟬声・琴声・松声・白露・白雪・白雲・松葉・木葉・黄葉・秋風・秋月・秋霧・秋色・雲路・野山・郭公・藤袴・菖蒲・去年・立春・指南

また、詩歌並列一対のものでないが、上巻において、詩と歌で、どこかで共通語となっているのは十二語である。

桜花・白玉・秋山・秋芽・秋夜・夏夜・雁声（音）・一年・今年・相見（看）・独寝・吾身

次に、下巻が加わることによって、上巻の語が詩歌の共通語となる

のは三七語である。そのうち、上巻で歌のみの語が、下巻の詩で共通語となるものが二七語と多く、傍線を引いた。その逆の、上巻に詩のみの語が下巻の歌で共通となるのは少く、一〇語である。

花景・初花・春雨・春日・春霞・夏草・秋野・秋穂・冬日・草葉・草木・初夜・夜月・長宵・松風・虫声・鹿声・野辺・山辺・山河・月影・月光・若菜・蜕蟬・大虚・仮廬・千種・千々・水上・涙河・織女・翼鼓・片身・郁子・今朝・年月・経年

これら三七語のうち二六語は下巻で並列例のある語（波線の語）である。

このように、下巻の詩歌によって（特に詩によって）上巻の語（特に和歌の語）が詩歌共通語となることが多いことがわかる。

〈下巻〉

下巻で詩歌並列一対をなし、その中で共通語となっているのは六八語ある。

白露・白雪・白雲・白波・松葉・木葉・黄葉・草葉・春雨・春霞・夏草・夏風・夏樹・夏夜・秋風・秋野・秋穂・秋虫・秋露・秋霧・秋夜・冬夜・初夜・夜露・山辺・山河・山風・早湍・流水・涙河・銀河・天河原・草木・野草・野辺・朽木・木高・花影・月影・若菜・谷風・大虚・大海・雲居・蜕蟬・虫涙・仮蘆・千種・遊糸・彦星・織女・神女・磯上・翼鼓・郭公・郁子・古里・彷彿・独寝・人身・吾身・方身・今朝・一年・年内・経年・去年・無限

また、詩歌並列一対のものではないが、下巻において詩と歌の語がどこかで共通語となるのは十五語ある。

春日・冬日・秋月・秋霧・雁声・虫声・鹿声・月光・天雲・天漢・千々・枝花・長宵・潤衣・濤花

次に、下巻の語が上巻の存在によって詩歌の共通語となるのは十五語ある。そのうち下巻で歌のみの語が上巻の詩によって共通語となるのは五語のみ、その逆の、下巻の詩のみの語が上巻の歌で共通となるのは一〇語あり傍線を引いた。またこれら十五語のうち、六語は上巻で詩歌並列の共通語にあるもの（波線の語）である。

鶯声・蟬声・琴声・初花・秋芽・松風・夜月・雲路・水上・菖蒲・指南・相見・片身・今年・年月

このように、下巻では、並列しない詩歌の共通語は少く、又、上巻の存在によって新たに共通語になる語も少い。即ち、下巻のみの並列詩歌共通語によって共通語になっているものが圧倒的に多いのである。

以上のことは、むろん異り語で調査している。数量的にまとめると次のごとくなる。

巻 ＼ 共通語	上巻	下巻
詩歌数	119首	159首
並列の共通語	25語	68語
非並列共通語	12語	15語
他の巻による共通	37語	15語
計	74/119	98/159
%	62.2	61.6

この表から、上巻・下巻の特色が出てくる。即ち、詩歌数（一対を一首と数え）が上巻より下巻に多いものの、詩歌並列共通語は、上巻より下巻に二倍半以上も多く、並列しない共通語は、上下巻ほぼ同数で、他の巻によって共通語化するのは上巻に下巻の倍以上もみ

られる。そして、詩歌の上下巻での数に比すると、上下巻での夫々の合計は、六〇％余りでほぼ等しく出現していることになる。また、上巻にのみの（下巻にない語）共通語は十一語（野山・松声・秋色・花樹・花香・桜花・梅花・白玉・秋山・藤袴・立春）、下巻にのみの（上巻にない語）共通語は三五語で、これも下巻に多い（秋穂・冬夜・夜露・朽木・木高・蓬生・山風・虫涙・大海・早湍・遊糸・夏風・夏樹・天河原・彦星・神女・磯上・古里・人身・髣髴・年内・無限・秋虫・秋露・野草・白波・天雲・谷風・雲居・枝花・流水・天漢・銀河・潤衣・濤花）。さらにそのうち、上巻に並列一対一例のみという語は傍線の四語、下巻に並列一対一例のみという語は傍線の二二語である。両者とも下巻に三倍以上も現れている。

このようにみてくると、下巻は、詩歌並列の共通語を増して、共通語を上巻以上にきわだたせるのみならず、上巻の非共通語をも下巻の存在によって共通語化し（特に詩によってそれを行い）集全篇の共通語を印象づけようとしていることがうかがえよう。上巻と下巻とで編者が相違することなど種々考えられるが今はそれに触れない。

三

『新撰万葉集』は、『寛平御時后宮歌合』の歌がかなり入集している。その歌合は又、『古今集』にも多く入集しているから、この三者には共通語が多く出現する予測は誰にもすぐにたつ。事実、『新撰万葉集』の和歌の語彙は、『古今集』の語彙と共通するものが非常に多いのである。今、名詞・体言（形容動詞語幹も含む）・形式名詞・擬声・擬態語（「切々（きりきり）」など）について、『古今集』の語彙と比較すると、『古今集』にある語が三〇三語、無い語が四九語となる（索引通りの語彙でなく「冬の日」「夜の露」なども含めた）。ゆえに、三五二語中八六・一％が『古今集』と共通語なのである。体言系しかみていないが、八割以上九割近くが共通語である。そして、『新撰万葉集』の詩歌共通語も、ほとんどが『古今集』と同語である。そうでないのは、「夏風・夏樹・秋穂・秋虫・秋色・冬日・松風・松声・夜月・夜露・蓬生・雲路・頻波・虫涙・枝花」の十五語のみで、異り語一〇八語の中では十三・九％である。「虫涙」は、一語化していないが「虫のごと声にたててはなかねども涙のみこそしたに流るれ」（古今恋二581深養父）のごとき歌はある。『貫之集』には「松声・松風」があり、「雲路」は、『後撰集』に五例も現れ、「蓬生」は『拾遺集』にある。「夏の夜の月」「花の枝」（「枝の花」は詩にもないようで、「花枝・花柯」が漢詩に多い。『新撰万葉集』でも（三一）に「花柯」がある）は『後撰集』に現れる。「頻波」は、『万葉集』に「敷波」があるが八代集にない。「冬日」「虫涙」は『詞花集』に、「秋色」は『新古今集』に現れる。「夏樹」は本文に問題があるので省くと、『新撰万葉集』の詩歌共通語で『古今集』にない十五語も、『貫之集』や三代集（さらに八代集）には大部分が用いられている。そして全体がそうであるのみならず、『新撰万葉集』の中で『古今集』と共通しない歌においても、詩歌共通語は、やはり『古今集』の語が多いのである。

なお、漢詩にしかない語の中にも、上下巻合せて異り語で三〇語余り（詩語索引がないので厳密でない。上巻十五、下巻二一）が『古今集』語彙と共通とみてよいものがある。（別の機に詳述したい）。『古今集』に相当する語の訓みを仮りにつけておく。

〈上巻〉春情・春風・山下・山人・水音・濤音・夜々2・朝々4・一声・一時・一日2・樹々2・千歳9・涙血・深緑（古今集では「浅緑」）（数字のないのは一例の語）

〈下巻〉春色・春風・秋夕・初霜4・山中・山人・山嵐・水音・濤音・樹下4・花色9・夜袂・夜深3・月桂2・古枝・池底・柳絲・一夜・涙玉・涙血・相語

これらの語を『古今集』の語に当て、その歌の作者をみてみると、延べ六二首のうち、撰者十七、僧九、その他の人十七、よみ人しらず十九首である（傍線は撰者に、波線は僧にある語）。漢詩文に強いと思われる大内記や御書の所預をした人々、友則三、貫之六、敏行二を合わせると二二首で六二首中の三五・五％を占める。撰者のみでは二七・四％であり、『古今集』一一一一首中撰者一四三首の占める割合一二・九％からしてもやはり多い。右に挙げた詩の語のほとんどは、『白氏文集』や『菅家文草』などにある。『白氏文集』の全ては見ていないが、「春情・夜袂・初霜・山嵐・古枝・深緑・池底」以外は見出している。「水音」「濤音」は、「水声」「濤声」が『白氏』にあり、「春情」はないようだが「春心」はある。「春情」は『菅家』にあり、「初霜」も「早霜」（「霰、波豆之毛、早霜也」和名抄）が『白氏』『菅家』にある。「山嵐」は『経国集』『文華秀麗集』にある。「涙玉」は、『白氏』『菅家』に「涙珠」がある。このように、大部分が日中の漢詩に見出せる語なのである。

四

『新撰万葉集』上巻における並列の詩歌共通語については、そのほとんどが、詩語・歌語、又は詩歌好みの語であり、その和歌の語は、『古今集』と共通する語がほとんどであり、詩の語も、『白氏』や『菅家』などとの共通語が非常に多いのである。それについては、既に述べたことがあるが再び触れておく。[注3]

まず、暦日の「立春」や動植物名の「郭公・秋芽・菖蒲・藤袴」を除き、前出の上巻の共通語をまとめると次の如くなる。

梅花・桜花・花樹・花香
鶯声・蟬声・琴声・松声
白露・白雪・白雲
松葉・木葉・黄葉
秋月・秋色・秋風・秋霧
その他―野山・雲路・去年・指南

この中で、「桜花・松声・白露・白雪・白雲・黄葉・秋月・秋色・秋風・秋霧・雲路」は、明らかに歌語といえ、詩語から出た語が多いようである。[注4] 他の語も、詩歌好みの語である。「その他」以外は、語構成上の特色が見出せる。即ち、「―花」「花―」「―声」「白―」「―葉」「秋―」で構成されている。これらの語基は、他の語基と結びついて別の歌語・詩語にもなりやすいものであり、右の語彙のみならず、これらの語基も、『白氏』や『菅家』など漢詩によく現れている。即ち、歌語・詩語・詩歌好みの語は、和漢で、語彙のみならず語構成も、さらに漢字表記した時の文字も一致することが多いのである。筆者は、『古今集』の語彙について「春―・夏―・秋―・冬―」[注5]「初―」「白―」「山―」など語基を中心に語彙を考察しつつある。そして、本来和語にあった語の他に漢語から造ら

れた和語もあるが、それも含めて、語彙として漢字表記をした時に、漢詩によく現れる語基や語彙と共通するがゆえに、それらの語基や語彙が改めて和歌の語として意識されて撰者らに好まれていったのでないかと推察してみた。『新撰万葉集』は、和漢の共通語彙に対する意識を探ることができるので上巻については少し考察したのであった。[注5] 下巻については、別稿にするが、下巻では、上巻の右の語のくり返し強調であったり、新たに共通語を大量に増加させているのは、初めに挙げた語の列挙によってわかるであろう。そして、共通語の特色として言えるのは、上巻と同様に、詩語・歌語・詩歌好みの語が多いことである。「春雨・春霞・春日・夏夜・秋山・秋夜・白玉・白波・初花・濤花・花影・虫声・鹿声・雁声・山河・山辺・涙河・草葉・野草・露草・朽木・松風・谷風・月影・雲居・天雲・天漢・大海・遊糸・蛻蟬・潤衣・（「春霞・涙河」については後述）」などは、『古今集』など和歌に用いる歌語であり、『白氏』や『菅家』などの詩にみられる語である。他の語もほとんどは、『古今集』『貫之集』三代集・八代集によく現れ、詩歌好みの語なのである（これらのことを既に調査しているが別稿とする）。[注5]

このように、『新撰万葉集』の共通語は、上下巻とも、詩語・歌語・詩歌好みの語が多いのである。

五

ところで、上巻と下巻とで、共通語にいささかの相違もみられる。初めに、共通語の抜き出し方のところで少し触れたが、上巻には、和漢で意味が相違する共通語はほとんどない。とはいえ、

何人鹿来手脱係芝藤袴秋毎来野辺緒匂婆須（六九〔一三七〕）
秋来野外莫二人家一　藤袴締懸玉樹柯
借問遊仙何処在　誰知我乗二指南車一（六九〔一三八〕）

のごとく、植物名「藤袴」が漢詩では（仙人か誰かの）「袴」の意が強い。ただし、和歌でも「袴」の意を掛けているから、和漢で意味を異にしているとはいえない。しかし、漢語「藤袴」は、和歌に合せた語で、普通の漢詩に見出せない和語である。（四三）の和歌にも「藤袴」があるが詩では「花」のみとなっている。植物名の「（秋）萩」も、和歌で「（秋）芽」となり、詩でも「（秋）芽」「芽花」になっている。この文字遣いは、『万葉集』にならったものと思われるが、[注6] これも和歌に合せた語である。

秋芽之花開丹芸里高猿子之尾上丹今哉麗之鳴濫（六四〔一三七〕）
三秋有レ恋号二芽花一　麗子鳴時此草奢……（六四〔一三八〕）
白露之織足須芽之下黄葉衣丹遷秋者来芸里（四九〔九七〕）
秋芽一種最須レ憐　半尊殿紅半尊遷……（四九〔九八〕）

「萩」の中国語は、「かはらよもぎ」で、別の植物である。和歌に合せて詩の「秋芽」「芽花」の意味を用いていること、右の例詩からわかる。また、（字音よみと思えるので）共通語に入れなかったが、

菖蒲草五十人沓之五月逢沼濫毎来年稚見湯礼者（三一〔六一〕）
五月菖蒲素得レ名　毎レ逢二五月一是成レ霊……（三一〔六二〕）

のごとく「五月」を、和歌で「せち」（「節」か）と訓ませていて、これなどは、同じ意味を持つ語の文字合せが中心になっている。この他に、前述した「夏山丹」（七）「一夏、山中……」のごとく、文字上は共通語にみえるが、語句の切れめが異っていて、共通の一語といえない語もある。が、上巻には用例が少い。上巻は、並列一

対共通語も下巻ほど多くなく、その共通語も、詩歌でほとんど意味を一致させて用いている。それに反し、下巻では、共通語の増加のみならず、視覚上の共通化も増加する。

磯之上古杵心者秋之夜之黄葉折丹曽……（一〇〇（三九八））

……蕪磯上波洗二松根一　河内凍水泥二苔葉一（一〇〇（三九九））

のように、固有名詞（枕詞「石上」）も、詩では文字通りの普通名詞に用いている。上巻の「藤袴」「秋芽」のように、和歌で用いる語をそのまま漢詩に用いることも上巻より下巻で増す。「春霞・秋穂・野辺・若菜・蓬生・仮盧・古里・涙河・虫涙・天河原・彦星」などがそれで、普通の漢詩に見出していない。これら全てが下巻で並列詩歌を持っている。「秋穂」「虫涙」以外は歌語であり、この二語も歌語まがいの語である。「若菜・野辺・仮盧・涙河・春霞」は上巻にもあるが、和歌にしかない語である。それ以外は下巻にしかない語である。

春霞起出留野辺之若菜丹裳成見手芝鉋人裳摘八斗（一三五（一三九））

……野人喜摘春若菜　山人往還草木楽（一三五（一三〇））

春霞柳曳山之仮蘆丹者涌瀬而已許曽……（一三九（一三七））

春霞桜枝凝二白花一……仮盧前泉鳥傷梅……（一三九（一三八））

不飽芝手別芝初夜之涙河与砥美裳無裳涌立心歟（一三八（四七四））

不レ飽良君自別離　初夜涙河堰　無レ留……（一三八（四七五））

恋佗沼天河原倍往手志歟亘彦星逢砥云成（一五三（五〇四））

天河原往恋機趁　無彦星鳴佗不レ報……（一五三（五〇五））

このように、全用例は挙げないが前掲の全ての語が、漢詩においても和歌の意味とほとんど同じに用いられている。「霞」などは、中国語としては、「朝焼け(雲)、夕焼け(雲)」を意味するのが普通だが、「霞カスミ」（名義抄・色葉字類抄・和名抄）と古辞書類にもあるように、日本語としては「かすみ」の意になっていて、右の（一三九）の語でも、「春霞」が「桜の枝」に「白き花」のように白くかかっているさまであろう。『菅家文草』にも「……浅春暫謝上陽初　鎖レ沙草只三分許　跨レ樹霞纔半段余……」（「同賦二春浅帯二軽寒一応製」）のごとく、「樹にかかる霞」を日本語の「かすみ」の意で用いた例が見出せる。[注7]

「涙河」は、周知のように漢詩から発想された歌語で、それがそのまま詩に用いられている。「天河原」についても「天河」は、元稹・王維・李白らの詩にも見出せるが、「天河原」は無い。それのみならず中国語で「河原（源）」「川原（源）」は、「河川の源」を意味することが多いようで、「川が流れる原野」を意味することもあるが、その原野は広い荒野の印象がある。しかし日本語の「かわら」には、原野・荒野のイメージはない。（一五三）の漢詩には日本語の「天の河原」がそのまま用いられているといえよう。

このように、漢詩や詩語から発想された「涙河」なども含めて、和語にしかない語を、そのまま漢詩の語に、意味も用法も同じく使用して歌語を生かそうとしている。漢字で書いて同一の対応漢語がない場合、強引にそのまま漢詩に使用しているのである。それも上巻のように植物名でなく、普通名詞である点で特色をなす。また、初めに触れた「郁子」のように、上巻では和歌にのみ用いて、単に訓みを借りただけの語をも下巻では共通語化する。

鶯者郁子矣鳴濫花桜　折砥見芝間丹且散丹芸里（一三（一三三））

打吹丹秋之草木之芝折礼者郁子山風緒荒之成濫（一八七（一三三））

郁子裳垂　任二山風一　許由袂招校二秋草一……（一八七（一三三））

また、和語のよみ方を詩にまで及ぼすこともある。

梅之香緒袖丹写手駐　手者春者過躰片身砥将レ思（一一〔三一〕）
開者且散緒可レ惜芝春之方見丹摘首駐鶴……、可レ惜春風花再散　亭前片身暗樹早（一三七〔一七四〕）

「かたみ（形見）」を、和歌で「片身・方見」と当て、その「片身」の方に詩を当てて、和歌での意味とは別に、その文字の意味する語として用いている。逆に、詩の語と文字に合せて和歌の語の表記をしたものもある。

白雲丹翼鼓替芝飛雁之影佐倍見留秋之月鉋（一九八〔二五四〕）
秋天飛翔雁影見　翼鼓高翥聞三雲浦一……（一九八〔二五九〕）
夕三里夜於保呂丹人緒見手芝従天雲不晴心地許曽為礼（二四三〔四八四〕）
江雁明失廻雲瀞　人侶友別三里趁……（二四三〔四八五〕）

「（二〇四）神女（又は「をとめ」）」や「（二三二）織女」「（一八三）大海」「（一四八）蜕蟬」「（一八四）銀河」「（一三九）指南」「（二四二）髣髴」なども、詩の文字に和歌の文字を合せたと見てよかろう（ただし『名義抄』などにも、傍線の語はその訓みで出ている。「わたつみ」は「海神」の文字である）。また、初めに挙げたように、一語とみるよりも連語とみる方がよいので共通語に入れなかったもの「散花…」等々、前出の他に「析花・何事・幾間・問人・風寒・常焦・降雪・迅散・身殺・還道・吹過」など多い。

嵐吹山辺之里丹降雪者迅散枝之花砥許曽見礼（三一〔四一〇〕）
冬月冬日山嵐切　降雪迅散花柯寒……（三一〔四二一〕）

このように、一首の詩歌が多くの共通語・共通字を連ねて持つものも珍しくはない。和歌の助詞・助動詞や和語の活用語尾をも詩にとり込んで同一文字を並べることさえある。下巻もあとになるほどかかる傾向は著しい。

降裳向は著しい。
降裳不敢鎮南雪緒冬之日之花砥見礼早鳥之認寛（三一九〔四三六〕）
南山雪晴　松柏緑……天気稍却早鳥趁（三一九〔四三七〕）
女倍芝秋之野風丹打靡杵心一緒誰丹寄瀛（二六七〔五三二〕）
秋風花レ繋草木靡　誰許寄瀛止二野陵一……（二六七〔五三三〕）
打敷物緒思歟女倍芝世緒秋風之心倦介礼者（二七四〔五四六〕）
打乱緒秋風収倦　世緒女郎貌絶饒……（二七四〔五四七〕）
鶯之陬之花哉散沼瀛佗敷音丹打蠅手鳴（二〇〔五九〕）
女芝露孕秘三雛前　江公位保翳佗敷……（二五〔五一三〕）

（上巻には和歌にしかない「佗敷」を、下巻で詩に用い、「女郎」も和歌の文字に近く「女芝」とする）

ここまで来ると、和歌が中心になって、その文字面に合わせることが詩訳の焦点になっている感さえある。また、

白妙之浪道別手哉春者来留風立色丹花裳析芸里（一三三〔二六五〕）
浪花妙白漁父吟　……別道留レ湖岩一汀霞（一三三〔二六六〕）

これは、語句の切れめも語順も異っていて意味も異り、別語であるが、並列された時に一見、一語のごとく見える。なお意味に大差なく語順の異る例は多く、「（六三）風之涼・涼風、（二四六）天漢・漢天、（一六四）白露之玉・玉露、（一六六）天雲・雲天、（一五五）草繁・繁草、（一九四）露寒・寒露、（一四一）頻波・愁浪頻、（一七六）潤衣・衣潤」などが見出せる。また漢文訓読式に反読文字による共通語も上巻（「（一〇九）被レ厭」くらい）より下巻に多い（「（一三五）不レ駐・（一三七）可レ惜・（一六八）被レ倡・（一三八）不レ飽・（一三九）無レ限・（一四九）不レ添」など）。

六

このように、下巻は、共通語・共通字が上巻よりはるかに多く、それが視覚上の大きな特色をもなしている。『新撰万葉集』は、「和歌に対する漢詩の意訳の仕方は、一首の和歌の作意に随順して対訳してゆく方法というよりも、歌中の語句によって喚起される漢詩的イメージをまとめ上げているという感がある」[注9]といわれる。詩歌共通語の多さもかかる方針から生じた現象かもしれないが「漢詩を和歌と並べ掲げたことによって……（中略）和歌が漢詩と肩を並べるように宮廷文学として発育してきた現実の事態が大きな意味を持っている」[注9]のであり、和漢の共通語が両者の橋渡しを直接に担う重要語であっただろう。下巻はその意図が露骨なまでに現れているが、下巻の序文に「凡以在々処々歌曲儛家々宴々聳聞也……」「則以使視レ歌興レ詩詠之者……」とあり、今まで歌われるものという捉え方をしてきた歌が、「視レ歌」としてもみられてきたことが察せられる。「よむ」が音読に、「みる」が黙読にほぼ相当するから、「視歌」は歌の文字を見るのであり、『新撰万葉集』はまさに「視る」ための詩歌集のように思える。そして、正訓仮名を多くして共通字・共通語を増して、詩歌の対等化を視覚上も明瞭にしようとしたのでないだろうか。下巻は特にその傾向が著しい。対応漢語のない和語までそのまま詩に用いて、和語の漢語化という逆の現象までみられる。

ともあれ、和歌の語を詩の語と比肩させようとする意識は十分に読みとれる。この意識は『古今集』撰者らにも何らかの意味であったと思われ、[注11]『古今集』の語基や語彙の多くが、漢詩によくある語基や語彙と共通する現象などに現れていると思えるのである。[注12]

〈注〉

(1) 詩歌一対を一体的に享受させようとしたという説、泉紀子「新撰万葉集における漢詩と和歌」（『女子大文学32号、昭和56年3月）等がある。

(2) 語によっては「之」の有無は重要である。「松葉」と「松之葉」など、意味は同じだが別の語とみる方がよいものもある。「松葉」が一例しかなく、八代集にもなく、「松之葉」の方が用例が多いし、三代集にある。

(3) 拙稿「新撰万葉集における和漢の共通語彙について」（『光華女子大学研究紀要』第二六集、一九八八年十二月）

(4) 拙稿「古今集における『白―』『初―』『四季―』の語彙」（光華女子大学研究紀要』、二四集、一九八六年十二月）「古今集における『山―・川―・草―・木―』の語彙」（光華女子大学研究紀要』、二五集、一九八七年十二月）

(5) 拙稿「新撰万葉集における和漢の共通語彙について（続）」（光華女子大学研究紀要』、二七集、一九八九年十二月予定）

(6) 沢瀉久孝「菅家万葉集の和歌の用字に就いて」（『菅公頌徳録』北野天満宮、昭和十九年七月）

(7) ただし、「秋霞」という語は、略賓王の詩に見出せる。「岸廻秋霞落、潭深夕霧繁、……」（「晩渡黄河」）（「秋霞」と「夕霧」が対になっている）。また、「秋霧」という語も「秋霧連レ雲白……」（王昌齢「沙苑南渡頭」）や『菅家文草』に「賓来秋霧遠、旅宿暁波喧」（「孤雁」）のように詩にある。「秋―」に対する「春―」、「―霧」に対する「―霞」の語構成から、和語「秋霧」「春霞」が造られた可能性がある。むろん『万葉集』に既に「春霞」はこの文字であるから、本来の和語になければ当時に造語された歌語であろう。

(8) これらのうち、「天漢・天雲・頻波・潤衣」は、並列しない詩歌も含めると、語順もこのままの共通語が見出せるので前出の共通語の中にむろん含ませている。

(9) 藤岡忠美「新撰万葉集」（『和歌文学講座4』桜楓社、昭和四五年）

(10) 拙稿「平安時代言語生活からみた歌と物語」（『国語国文』第四五巻第四号、昭和五一年四月）

(11) 『新撰万葉集』の第一の編者を道真に、第二の編者を貫之とする説がある。泉紀子「『新撰万葉集』の成立についての試論」(『女子大文学』第三四号、昭和五八年三月)。最終の編者を貫之とすると、下巻の序文により最終成立年は『古今集』より後になるが、貫之の和語・漢語の強い対比意識を知る参考になる。

(12) 語基と語彙の共通現象のみでは論証しにくいが、『新撰万葉集』や『古今集』における詩歌共通語に歌語の多いことは何か意味があろう。種々の現象を探りつつ積み重ねてゆきたい。

一九八九・一・十

—光華女子大学教授—